



Instagramは
こちらから!



伊藤 いとう さゆり

《自民党中野総支部政策委員》

1981年8月12日京都市生まれ
中野区立仲町小学校(現桃花小)卒業
中野区立第九中学校(現中野中)卒業
都立大泉学園高等学校卒業
天理大学文学部国文学国語学科中退
美容部員、エステティシャン、受付事務など
橋場そらとみどりの保育園大きなおうち父母会会長
谷戸小学校PTA会長
中野東中学校学校運営協議会委員
鍋横子どもと共に進む会役員
多田バスケットボールクラブ副代表
第49回わんぱく相撲中野区大会副会長
中野区障害者差別解消審議会委員

子どもの未来を、地域で支える

～居場所をどうつくるか、政治は何ができるのか～

対談

子どもたちの「安心」は、どこにあるのか。

家庭でも学校でもない、もう一つの居場所の必要性が、いま問われています。

子育ての現場で見えてきた不安、地域とのつながりの力、そして制度の壁。

伊藤さゆり政策委員と衆議院議員・黒崎ゆういちが、

「子どもの居場所づくり」と「政治の役割」について語り合いました。

黒崎 くろさき ゆういち

《衆議院議員(東京27区)》

1976年11月19日生まれ(49歳)

学生時代、明大中野中学でラグビーに会う

明治大学附属中野中学・高等学校卒業

背番号「1番」をつけ、明治大学の黄金時代を築く

明治大学政治経済学部政治学科卒業

明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科修了

日商岩井株式会社・株式会社メタルワンに所属

社会人15年目に夢であった政治への挑戦を決意

2015年、港区議会議員に出馬し、初当選(1,406票)

2019年、港区議会議員に出馬し、2期目当選(2,148票)

2024年、衆議院選挙(東京27区)に出馬するも、落選(59,952票)

2026年、衆議院選挙(東京27区)に出馬し、初当選(85,249票)

スイーツ&カラオケ&暴れん坊将軍を愛するゲコノミスト



公式LINEは
こちらから!



子どもの未来を、地域で支える

～居場所をどうつくるか、政治は何ができるのか～

だけでは変えられないと感じました。

【黒崎】まさに構造の問題ですね。

【伊藤】だからこそ、横断的に整理して、仕組みを変える必要があると思っています。

政治の役割は「つなぎ、決めること」 声を聞くだけでは、前に進まない

【黒崎】議員の役割は大きく2つあります。「利害の違う組織をつなぐこと」「最終的に決断すること」意見を聞くことは大事ですが、それだけでは何も進みません。最終的に方向を示すのが政治の役割です。また、国・都・区をつなぐことで、政策の実現力やスピードは大きく変わります。

【伊藤】地域と広い行政のつながりが重要ですね。

【黒崎】はい。その接続があることで前に進みます。

当事者として、声を届ける 子育て世代のリアルを政治へ

【伊藤】実際に活動を始めて、多くの方が声をかけてくださるようになりました。子育ての悩みや地域への思いなど、現場の声は多様です。

【黒崎】それが政治の出発点ですね。

【伊藤】今まさに子育てをしているからこそ分かることを、しっかり政治に届けていきたいと思っています。



持続可能でなければ意味がない 「ある人だけの居場所」に しないために

【伊藤】民間や地域の力も活用する必要がありますが、一番大事なのは「続く仕組み」にすることです。担い手がいなければ続かず、一部の人だけが使えるものでも意味がありません。

【黒崎】その通りですね。加えて、環境整備も重要です。夜間にスポーツができる場所が限られているなど、場所の制約が選択肢を狭めています。

【伊藤】確かに、場所がないと活動も広がりませんね。

【黒崎】地域単位だけでなく、広い視点で拠点を整備する必要があります。

【伊藤】中野区でも、段階的に整備を進めていきたいと考えています。

PTAがつないだ、地域との関係 「見えない活動」を「見える形」に

【伊藤】小さくてもイベントを続けることで、子どもたちや保護者から「楽しかった」という声をいただき、地域の方も関わりたいと思えることが分かりました。

【黒崎】ただ、気軽に声をかけにくいという現状もありますよね。

【伊藤】そうなんです。だからこそ、学校やPTAが「入口」になることが重要だと感じました。

なぜ政治なのか 現場では変えられない「構造」がある

【黒崎】今回、政治に挑戦される理由はそこにもありますか。

【伊藤】はい。活動を通じて感じたのは、行政の縦割りです。同じような話が別々の場で繰り返され、横のつながりが無い。これは現場

子どもの居場所は、なぜ必要か 「一人の時、この子はどこに行けば いいのか」

【伊藤】中野で育ち、今は子育てをしています。が、「私がない時、この子の居場所はどこにあるのか」という不安を感じてきました。特に災害時には、息子の学校は避難所ですが、町会の避難場所は別で、子どもが一人ですり着けるのかという不安がありました。

【黒崎】それはまさに「制度と現実のズレ」ですね。

【伊藤】だからこそ、地域の大人との関係が大切だと感じました。顔を知っている人がいれば助けてもらえる。その関係をつくるために、PTAや地域活動に関わるようになりました。

年齢とともに、居場所は減っていく 学童の“その先”にある空白

【伊藤】保育園、小学校、学童まではありますが、4年生以降は学童もなくなり、中学生・高校生になると一気に居場所が減ります。「放課後、どこにいるのかわからない」状態になることが課題です。

【黒崎】そこに対して、今の行政は十分な選択肢を提示できていません。だからこそ、「場所」と「関係性」の両方をつくる必要があります。

部活動は、もう一つの居場所になる ただし、学校だけでは支えきれない

【黒崎】私自身はラグビーをやっていて、部活動が居場所でした。

【伊藤】本当にそう思います。ただ今は、先生の負担が大きく、学校だけで支えるのは難しい状況です。だからこそ、地域で支える形が必要です。

【黒崎】まさに「学校か地域か」ではなく、「どう連携するか」ですね。

やさしさのバトンを未来へ

子どもの居場所づくりは、単なる施設整備ではありません。地域のつながりを取り戻し、安心できる関係を育てていくこと。そして、その仕組みを持続可能にすること。現場の声をもとに、一歩ずつ前に進めていく。その積み重ねが、地域の未来を形づくっていきます。「やさしさのバトンを未来へ」——次の世代へつなげる挑戦が始まっています。

